

# スペインに渡った肥前磁器の流通ルートについて

Distribution Route of Hizen Porcelain to Spain

野上 建紀

Nogami Takenori

# スペインに渡った肥前磁器の流通ルートについて

長崎大学 野上 建紀

## Distribution Route of Hizen Porcelain to Spain

Nogami Takenori (Nagasaki University)

### Abstract

This research note examines the distribution route of Hizen porcelain brought to Spain based on Hizen porcelain artifacts found in Spain. The history of Hizen porcelain started in the early of 17<sup>th</sup> century. And it was began to be exported overseas in the middle of the 17<sup>th</sup> century, and many products were shipped to Europe. Hizen porcelain was exported to Spain from the late 17<sup>th</sup> century to the early 18<sup>th</sup> century. Most of them were Arita porcelain. China's maritime ban policy has greatly affected the overseas export of Hizen porcelain, which has changed the distribution route. Hizen porcelain was most likely transported from Manila via Central America to Spain in the latter half of the 17<sup>th</sup> century. And from the end of the 17<sup>th</sup> century to the first half of the 18<sup>th</sup> century, Hizen porcelain was most likely imported from other countries in Europe.

**Keywords:** the galleon trade, Hizen porcelain, Spain

### はじめに

16世紀後半に始まったマニラ・ガレオン貿易によって、中南米の銀がアジアに持ち込まれ、そして、アジアの産物が太平洋を越えて、中南米に渡っていった。さらに中南米に渡ったアジアの産物の一部は、大西洋を越えてスペイン本国へと運ばれた。スペインはいわばマニラから始まる貿易路の終着点とも言える。これらは太平洋と大西洋の二つの大洋を渡って運ばれたものであり、それだけの価値や理由があった産物とも言える。

一方、スペインで発見されるアジアの産物が全てこのルートをたどったものであるかどうかはわからない。なぜならアジアとヨーロッパを結ぶ貿易のメインルートは、インド洋を経由するものであった。その主役は当初はポルトガルであり、ついでオランダがそれにとって代わり、そして、イギリスへと主導権が移っていったが、いずれもアジアの産物を大量にヨーロッパに持ち込んでおり、その量はスペインのガレオン船がヨーロッパに運ぶ

量の比ではなかった。つまり、ヨーロッパ域内の貿易ルートで入手することも可能であったかもしれないからである。

肥前磁器も同様であった。肥前磁器は17世紀初めに生産が開始され、17世紀中頃から海外輸出が開始された。江戸時代、海外輸出が盛んであった時期は、17世紀後半～18世紀前半であった。いわゆる「鎖国」時代であり、長崎から肥前磁器を輸出できた船は、オランダ船と唐船であり、ヨーロッパへはオランダ船が大量に肥前磁器を運んでいた。そのため、スペインへの肥前磁器の流通ルートも、太平洋と大西洋の二つの大洋を渡るガレオン貿易のルートと、インド洋と大西洋を渡るオランダ船によるルートが考えられる。本ノートではスペインで出土した肥前磁器、所蔵されている肥前磁器からその流通ルートについて考えたい。

## 1 スペインに渡った肥前磁器

スペインに渡った肥前磁器に関する研究は多くない。資料数が限られていることも理由の一つであるが、肥前磁器と認識されず、中国磁器と混同されていることも理由であろう。以下、スペインで確認されている肥前磁器を紹介するが、これまで中国磁器として報告されているものの中に含まれている肥前磁器の例もある。

### (1) スペイン出土の肥前磁器

スペインから出土したことが報告あるいは紹介されている肥前磁器は非常に少ない（図1）。数少ない例の一つが田中恵子が紹介しているカディス（アンダルシア州）出土の染付芙蓉手チョコレートカップ<sup>1</sup>である（田中 2010）。カディス博物館（Museo de Cádiz）に所蔵されているもので、生産地は有田、生産年代は1660～1680年代、法量は口径7.5cm、高さ7.5cm、底径3.7cmである（図2）。高台内には染付で「大明年製」銘が入る。類例がオアハカのサント・ドミンゴ修道院で出土している。もう一つはトレド修道院から出土したとみられる染付花虫文芙蓉手皿である（図3）。トレド（カステリーヤ＝ラ・マンチャ州）のサンタ・クルス博物館（Museo de Santa Cruz）に所蔵されているものである（Krahe 2016）。生産年代は1660～1680年代である。この種の染付花虫文芙蓉手皿は世界

<sup>1</sup> カカオを原料とした温かいチョコレートを飲むための容器である。同時代のコーヒーカップやティーカップと比べて、器高が高いことが主な特徴である。

各地で出土しており、中南米でもメキシコシティをはじめ、オアハカのサント・ドミンゴ修道院 (Monasterio de Santo Domingo)、アンティグアのサント・ドミンゴ修道院で出土している他 (野上 2017)、メキシコシティ郊外のサン・アンヘル地区のカサ・デル・リスコ (Casa del Risco) の中庭の装飾壁面 (野上 2010) やコロンビアのトゥンハのサント・ドミンゴ教会 (Iglesia de Santo Domingo) のマリア像のチャペルの壁面にも埋め込まれた状態で発見されている (野上・テレロス 2017)。

これらに加えて、これまで中国磁器と報告されているものの中にも肥前磁器が含まれている。いずれもキンタ・クラエ Cinta Krahe の著書 (Krahe 2016) の中で紹介されているもので、一つはセビージャ (アンダルシア州) のアラメダ・デ・エルクレス広場 (Alameda de Hércules) で出土した染付花虫文芙蓉手皿である (図4)。写真で見ると、生産地は有田、生産年代は1660~1680年代であり、トレド修道院から出土したとみられる染付花虫文芙蓉手皿と同種のものである。セビーリャ考古博物館 (Museo Arqueológico de Sevilla) に所蔵されている。もう一つはレオン博物館 (Museo de León) に所蔵されているカラセド・サンタ・マリア修道院遺跡 (Monasterio de Santa María de Carracedo) で発見された染付芥子文チョコレートカップである (図5)。やはり生産地は有田、生産年代は1660~1680年代である。類品がメキシコシティのテンプロ・マヨール (Templo Mayor) 遺跡、オアハカのサント・ドミンゴ修道院 (Monasterio de Santo Domingo)、アンティグアのサント・ドミンゴ修道院、ハバナのアルマス広場 (Plaza de Armas)、リマの市内遺跡で出土している (野上 2017)。

確認されているスペイン出土の肥前磁器は以上の4点である。すなわち、スペイン南部のセビーリャ (アンダルシア州)、カディス (同州)、スペイン中部のトレド (カスティーリャ=ラ・マンチャ州)、スペイン北部のレオン (カスティーリャ・イ・レオン州) であり、点数は限られているものの、地理的には広い範囲で出土が確認できる (図1)。

## (2) スペイン所在の肥前磁器

前掲の出土資料以外のスペイン所在の肥前磁器は、17世紀後半の染付製品と色絵製品、17世紀末~18世紀前半の色絵製品、そして、19世紀の幕末明治期の色絵製品などがある。2022年8月にスペインの現地調査で多くのものを実見することができた。

### ①17世紀後半

17世紀後半の染付製品は、マドリッドの国立装飾美術館 (Museo Nacional de Artes Decorativas) 所蔵の染付芥子文チョコレートカップである (図6)。田中恵子の紹介によると、口径8.3cm、高さ7.4cmであり、高台内に「太明年製」銘が入る (田中 2010)。色絵製品は、マドリッド国立装飾美術館所蔵の色絵蓮池水禽文芙蓉手皿 (図7) と色絵兎像 (図8) である (Tabar de Anitua 1983)。前者は口径21.3cm、後者は長さ10cmである。

### ②17世紀末～18世紀前半

2022年8月の調査の際にマドリッドの国立装飾美術館所蔵の色絵桐鳳凰牡丹唐草文大壺 (一対) (図9)、東洋美術館 (Museo Oriental) 所蔵の色絵菊梅文受皿付き碗 (図17)、インディアス総合古文書館 (Archivo General de Indias) 所蔵の色絵花鳥文瓶 (一対) (図21)、セラルボ博物館 (Museo Cerralbo) 所蔵の色絵椿桐文大皿 (図24)、色絵紅葉牛菊文大壺 (時計付き) (図22)、色絵菊紅葉文瓶 (一対) (図23)、マドリッド歴史博物館 (Museo de Historia de Madrid) 所蔵の色絵牡丹鳳凰文大皿 (金具付き) (図29) などを実見した。

その他、国立装飾美術館の館蔵品の図録には色絵花束唐草文大皿 (図10)、色絵牡丹菊文大皿 (図11)、色絵紅葉馬唐草文大皿 (図14)、色絵松桜文大鉢 (図12) などが掲載されている (Tabar de Anitua 1983)。いずれも有田の金欄手の製品である。内山地区の窯場で焼かれ、内山地区中央部に位置する赤絵町で上絵付されたものであろう。また、国立装飾美術館所蔵の色絵楼閣牡丹文瓶 (図13)、ソローリャ博物館 (Museo Sorolla) 所蔵の色絵牡丹菊鳳凰文大壺 (図30) やロマン主義博物館 (Museo del Romanticismo) 所蔵の色絵桜桐文大壺 (図28) などの「金欄手」製品があるが、ヨーロッパ製の模倣品か近代の製品の可能性が高い。

### ③19世紀

2022年8月の調査の際に東洋美術館 (Museo Oriental) 所蔵の色絵龍鳳凰鶴文大皿 (図18)、色絵藤花人物文大皿 (図19)、色絵桜人物唐草文大皿 (図20)、セラルボ博物館 (Museo Cerralbo) 所蔵の色絵武者絵大花瓶など (図25)、ロマン主義博物館所蔵の染付松梅鷹文大花瓶 (図27) などを実見した。

また、田中がマドリッド国立考古学博物館 (Museo Arqueológico Nacional) 所蔵の染

付竹林双鶴文大花瓶を紹介している。法量は器高153～155cm、口径43cm、胴回り60cm、底径33cm、底部には「日本肥前有田香蘭社深川製」の染付銘が入る（田中 2017）。

## 2 スペインに渡った肥前磁器の特質

いわゆる「鎖国」時代にスペインに渡った肥前磁器の年代は、その大量輸出時代に当たる17世紀後半～18世紀前半である。スペイン以外のヨーロッパの王宮や宮殿に残る伝世品やアムステルダムなどの出土資料の年代と大異なる。

17世紀後半の製品は染付と色絵があり、17世紀末～18世紀前半の製品はいわゆる金襴手とよばれる色絵が多い。生産地はいずれも有田内山を中心とした有田の窯場である。これらの特質もスペイン以外のヨーロッパ諸国と同様であり、中南米における状況とも共通している。器種構成については、資料数が少なく、細かい比率の数字はあまり意味を持たないが、17世紀後半の製品の中にチョコレートカップがみられる点は、中南米との共通性を感じさせる。カカオはメソアメリカ原産の植物であり、マヤやアステカではカカオ文化が根づいていた。スペインによる征服後の中南米でもそれは引き継がれ、他地域に比べてチョコレートカップの出土量は格段に多い（野上 2013）。スペインで出土しているこれらのチョコレートカップについて、宮田はその出土量の少なさから用途が判然としないとしているが（宮田 2017）、17世紀中頃のスペインの絵画でもモリニーニョなどチョコレートの飲用の道具とともに中国染付のチョコレートカップが描かれているため（野上 2019）、チョコレート飲用の容器とみてよいと思う。

## 3 スペインに渡った肥前磁器の流通ルート

スペインへの肥前磁器の流通ルートについて考える前に中国磁器の流通を考える。スペインへの具体的な陶磁器の流通ルートを示してくれる資料が沈没船資料である。航海記録、陶磁器以外の積荷などを検討することで、陶磁器の目的地を推測することができる。例えば、カリブ海のドミニカ沖で発見されているコンセプション（Concepción）号である。1641年にベラクルスを出帆し、スペインに向かう途中に沈んだガレオン船である。海底からは景德鎮の染付芙蓉手皿や染付チョコレートカップが回収されている。マニラから太平洋を越えてメキシコに運ばれ、さらに大西洋を渡ってスペイン本国へ運ぶ途上のものと推

定され、これらの磁器の類が太平洋と大西洋を越えて運ばれていたことは確かである。海外輸出された肥前磁器の多くは中国磁器の流通ルートをなぞるように流通するため、肥前磁器も当初このルートでもたらされた可能性は十分考えられる。

その中国磁器の流通ルートについては、宮田の研究がある（宮田 2017、Miyata 2016）。同じイベリア半島にある隣国ポルトガルでは、インド洋を介した貿易で大量の中国磁器が輸入されており、「陶磁の間」をもつサントス宮殿（Le palais de Santos）などでは多くの中国磁器が残されている。それに対し、宮田はスペインでの中国磁器の出土が他地域と比べても量が過少だとし、その理由についていくつかの可能性を提示している。すなわち、現在の研究者の関心や知識の欠如による調査研究上の理由を除いて、一つはスペインでのアジア商品の需要の低さ、もう一つはポルトガル等と比べた流通ルートの違いを挙げている。

そして、宮田はスペインのガリシア（Galicia）州西部沿岸部のバイヨナ（Baiona）やビーゴ（Vigo）から出土する中国磁器はポルトガルを経由して運ばれたものとしている（宮田 2017）。つまり、スペインのガレオン貿易によるものではない中国磁器の輸入ルートの存在を示唆している。さらにリスボンからアムステルダムをつなぐ大西洋沿岸貿易についても述べており（宮田 2017）、アフリカの喜望峰を周り、リスボンを経由したルートでヨーロッパに運ばれた中国磁器がポルトガルで重用され、さらに大西洋沿岸交易によりスペイン北部やアムステルダムへ、さらにはバルト海貿易へと、連鎖的にヨーロッパ全域にもたらされたとする（宮田 2017）。大西洋沿岸交易が行われていたのであれば、逆にオランダからアジアの陶磁器がスペイン北岸に運ばれる可能性、すなわちインド洋を経由して運ばれた陶磁器がスペインに持ち込まれる可能性もあるが、宮田の研究は主に16世紀後半から17世紀前半にかけてのものであり、肥前磁器が輸出された17世紀後半以降の大西洋沿岸交易については明らかにしていない。そのため、宮田もガリシア地方（特に内陸部）の17世紀以降の陶磁器に関しては、イギリスやオランダ人商人が運んできたという可能性も否定しきれないと述べるにとどまっている（宮田 2017）。

次に肥前磁器の流通ルートを考える。まず宮田が中国磁器の流通で述べているポルトガル経由のルートのみをみる。中南米では生産年代が1650年代に遡るような肥前磁器の出土は、例外的に1650～1670年代の染付八角形碗などがメキシコシティで出土しているぐらいであり、ほとんどは1660年代以降の製品である。一方、ポルトガルでは、リスボンにあるアジュダ宮殿（Palácio Nacional da Ajuda）所蔵の色絵撫子文輪花皿（金具付）のように

1650～1660年代の肥前磁器<sup>2</sup>が確認されている（田中 2011）。また、アジアのポルトガルの拠点であるマカオでも1650～1670年代の染付碗が出土している（野上 2005）。そのため、生産年代が1650年代に遡るような製品であれば、メキシコ経由ではなく、ポルトガルを経由してスペインにもたらされた可能性が高いが、ガリシア地方を含めたスペインでは1650年代に遡るような肥前磁器はまだ確認されていない。今のところ、肥前磁器の海外輸出の初期段階にポルトガルからスペインに持ち込まれたことを積極的に示す資料はない。

次に太平洋ルート、すなわちガレオン貿易ルートをみる。アジア海域の陶磁器貿易の構図は17世紀末の展海令の前後で大きく変わり、それに伴い、肥前磁器の海外輸出と流通ルートにも大きな変化がみられる。そのため、肥前磁器の海外輸出品も流通形態によって、清の海禁政策下の17世紀後半と展海令公布後の17世紀末～18世紀前半に分けられる。ガレオン貿易においても展海令以前の海禁政策下にあつては、清に抵抗する鄭氏配下の唐船が盛んに肥前磁器を輸出していたため、マニラへも唐船が中国磁器の代わりに肥前磁器を運び込んでいたのに対し、展海令公布後は中国磁器の再輸出が本格化し、肥前磁器をマニラへ輸出していた唐船も中国磁器を扱うようになっている。

スペインで出土している清の海禁政策下の17世紀後半の肥前磁器は2種類あり、一つは染付花虫文芙蓉手皿、もう一つは染付チョコレートカップである。これらは中南米では最も多く見られるもので、ベラクルスからハバナあたりを経由して、スペインに持ち込まれたものと考えてよかろう。前述のコンセプション号に見られるメキシコからスペインへ運ばれる中国磁器の流通ルートをなぞるように運ばれたと考える方が妥当であろう。

そして、展海令が公布され、清による海禁が解除された後に生産された製品が、伝世品に多い色絵の金欄手大壺や皿、瓶などである。生産された年代は、17世紀末～18世紀前半であり、展海令以降、唐船の陶磁器貿易の商品が中国磁器に立ち戻った後のものである。ガレオン貿易のアジア側拠点のマニラでも出土が確認されておらず、これらがどのような経緯とルートでスペインにもたらされたかよくわかっていない。まず中南米の肥前磁器の出土状況をみる。中南米における肥前磁器の分布範囲が17世紀後半においてはメキシコ、グアテマラ、キューバ、コロンビア、ペルーなど広範囲に及んでいるのに対し、18世紀前半の発見例はメキシコおよびキューバに限られており、量も少ない（野上 2020）。18世紀前半になって、唐船による陶磁器貿易が中国磁器を対象としたものに立ち戻るとい

<sup>2</sup> 1650～1660年代の色絵撫子文輪花皿（金具付）、口径14.5cm、高さ4.5cm、底径8.5cm、「福」銘、N° 498（王室収蔵品であることを示すもの）、所蔵目録番号 Inv° 49220

ことは、マニラに肥前磁器が持ち込まれる主要ルートが失われることを意味しており（野上 2020）、その影響によってガレオン貿易で中南米に運ばれる肥前磁器が量的に減少し、流通範囲が縮小したことは確かである。太平洋を越えて中南米に運ばれる肥前磁器が減少するのであるから、そこから大西洋を渡ってスペインに運ばれる肥前磁器もさらに減少すると考える方が妥当であろう。

一方、唐船はもちろんオランダ船もまた中国磁器を主に扱うようになって、ヨーロッパに関してはむしろ展海令以前よりも肥前磁器の輸出量が増えているのではないかと思われる（野上 2020）。伝世品はもちろん考古資料においても資料数は増加している。オランダ東インド会社の公式貿易自体は減退しているので、その脇荷貿易（私貿易）がその減退を補って余りあるものとなった可能性が高い。また、中南米ではヨーロッパ産の古伊万里写とみられるものがある。発掘資料ではないので、後世に持ち込まれた可能性も考えなければならぬが、ヨーロッパの古伊万里写がガレオン貿易によってアジア経由でもたらされるとは考えにくいので、大西洋を渡って運ばれたものとみてよいであろう。古伊万里写が大西洋経由でメキシコに運ばれる状況にあって、大量にアジアの磁器が持ち込まれているヨーロッパへあえて中南米側からスペインに肥前磁器を運ぶとも思えない。

ガレオン貿易による中南米への肥前磁器の貿易量の減少、オランダ船の脇荷貿易による貿易量の増大を考えると、宮田が指摘する大西洋沿岸貿易によってヨーロッパ地域内からスペインへ持ち込まれた可能性は十分考えられ、むしろそれは高いと思う。つまり、展海令を境に、17世紀後半と17世紀末～18世紀前半では肥前磁器のスペインへの流通ルートが変化した可能性が高い。

## おわりに

マニラまでは多様な商品が持ち込まれるものの、マニラでのみ消費されるものと、さらに中南米まで運ばれるものの間には品質の差がみられ、それが生産地の違いでもあることはこれまでも述べてきた（野上 2013）。つまり、マニラから太平洋を越えてまで運ぶ価値があるかどうか判断の基準の一つとなったのである。これはガレオン貿易に限ることではなく、インド洋を介したアジア・ヨーロッパ間の貿易においても同様であり、東南アジアでは有田や波佐見など様々な産地や品質の肥前磁器が出土するが、ヨーロッパまで運ばれるものはほぼ品質の良い有田焼に限られていた。遠隔地に運んでも利益が出る付加価値

値の高いものが選ばれたというわけである。

こうした判断は、中南米のメキシコからさらにスペインへ運ぶ際にも行われる。つまり、一つの大洋を渡らせる価値はあるが、二つの大洋を運ぶまでの価値があるかどうか、中南米で消費するよりも有益かどうか、さらにそれはヨーロッパの他の国々の商人から購入するよりも有益かどうか考えられるのである。二つの大洋を渡っても利益が上がるのであれば、運ぶことになるであろうし、そうでなければ、大西洋沿岸交易などによってヨーロッパ地域内から入手することになる。

17世紀後半においては、まだ磁器の希少性もあって、ガレオン貿易によって太平洋を渡り、さらに大西洋も越えたが、17世紀末から18世紀前半にかけて、オランダやイギリスなどの船によって大量のアジアの陶磁器（主に中国磁器）がヨーロッパに持ち込まれるようになる中、メキシコからあえてスペインに金欄手古伊万里を運ぶほどの価値を見出せなくなったのではないかと考える。

本研究は、JSPS 科研費19H01300、22H00688の助成を受けたものである。

#### 引用文献・参考文献

- 田中恵子 2010「メキシコ、キューバ、スペインでの4個の肥前染付のチョコレート・カップの発見－17世紀のスペイン貿易による知られざる肥前磁器の交易ルート」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁学会
- 田中恵子 2011「イベリア半島の肥前磁器」『セラミック九州』No. 47 佐賀県立九州陶磁文化館4-5
- 田中恵子 2017「在欧の知られざる19世紀の大花瓶」『セラミック九州』No. 53 佐賀県立九州陶磁文化館4-5
- 野上建紀 2005「澳門出土の肥前磁器」『金大考古』50号7-11
- 野上建紀 2010「カサ・デル・リスコの東洋磁器」『金大考古』67号10-18
- 野上建紀 2013「ガレオン貿易と肥前磁器－二つの大洋を横断した日本のやきもの－」『東洋陶磁』42 141-176
- 野上建紀 2017『伊万里焼の生産流通史－近世肥前磁器における考古学的研究』中央公論美術出版
- 野上建紀 2019「太平洋を渡ったチョコレートカップ」『東アジア海域から眺望する世界史－ネットワークと海域』中国社会研究叢書 21世紀「大国」の実態と展望7 明石書店 267-301
- 野上建紀 2020「長崎輸出の金欄手今萬里の生産と流通について」『東洋史研究』79巻3号1-36
- 野上建紀・エラディオ テレロス エスピノサ 2017「コロンビアに渡った東洋磁器」『多文化社会研究』3号165-177
- 宮田絵津子 2017『マニラ・ガレオン貿易－陶磁器の太平洋貿易』慶應義塾大学出版会
- Krahe, Cinta 2016. *Chinese Porcelain in Habsburg Spain*. Centro de Estudios Europa Hispánica.
- Miyata, Etsuko 2016. *Portuguese Intervention in the Manila Galleon Trade*. Archaeopress Archaeology.
- Tabar de Anitua, Fernando 1983. *Ceramicas de China y Japon en el Museo Nacional de Artes Decorativas*. Ministerio General de Bellas Artes y Archivos.



図1 スペイン国内肥前磁器出土分布図



図2 カディス出土染付芙蓉手チョコレートカップ (田中2010より)



図3 トレド出土染付花虫文芙蓉手皿 (Krahe 2016)

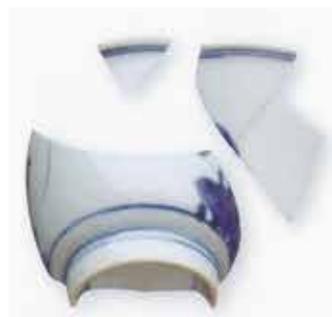


図5 レオン出土染付芥子文チョコレートカップ (Krahe 2016)



図4 セビージャ出土染付花虫文芙蓉手皿 (Krahe 2016)



図6 染付芥子文チョコレートカップ (マドリッド国立装飾美術館所蔵、田中 2010)



図7 色絵蓮池水猛禽文芙蓉手皿 (マドリッド国立装飾美術館所蔵、Tabar 1983)



図8 色絵兎像 (マドリッド国立装飾美術館所蔵、Tabar 1983)



図9 色絵桐鳳凰牡丹唐草文大壺 (マドリッド国立装飾美術館所蔵)



図10 色絵花束唐草文大皿 (マドリッド国立装飾美術館所蔵、Tabar 1983)



図9 色絵桐鳳凰牡丹唐草文大壺 (マドリッド国立装飾美術館所蔵)



図11 色絵牡丹菊花文大皿 (マドリッド国立装飾美術館所蔵、Tabar 1983)



図12 色絵松桜文大鉢 (マドリッド国立装飾美術館所蔵、Tabar 1983)

図13 色絵楼閣牡丹文花瓶 (マドリッド国立装飾美術館所蔵、Tabar 1983) (左)



図14 色絵紅葉馬唐草文大皿 (マドリッド国立装飾美術館所蔵、Tabar 1983)



図15 色絵鶴窓絵文蓋付壺 (マドリッド国立装飾美術館所蔵、Tabar 1983)

図16 色絵牡丹鶴文大花瓶 (マドリッド国立装飾美術館所蔵、Tabar 1983)



図17 色絵菊梅文受皿付き碗 (東洋美術館所蔵)



図18 色絵龍鳳鶴文大皿 (東洋美術館所蔵)



図19 色絵藤花人物文大皿 (東洋美術館所蔵)



図20 色絵桜人物唐草文大皿 (同蔵)



図22 色絵紅葉牛菊文大壺 (時計付き) (セラルボ博物館所蔵)



図21 色絵花鳥文瓶 (インディアス総合古文書館所蔵)



図23 色絵菊紅葉文瓶 (セラルボ博物館所蔵)



図24 色絵椿桐文大皿 (セラルボ博物館所蔵)



図25 色絵武者絵大花瓶（左）・色絵海浜文大花瓶（右）（セラルボ博物館所蔵）



図26 色絵松鶴文大花瓶（セラルボ博物館所蔵）



図27 染付松梅鷹文大花瓶（ロマン主義博物館所蔵）

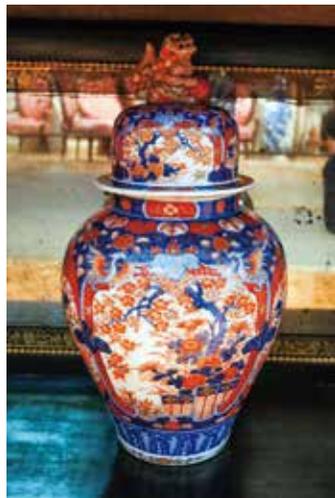


図28 色絵桜桐文大壺（ロマン主義博物館所蔵）



図29 色絵牡丹鳳凰文大皿（金具付き）（ロマン主義博物館所蔵）



図30 色絵牡丹菊鳳凰文大壺（ソローリヤ博物館所蔵）

表 ス페인所在の肥前磁器等

No.	名称	年代	法量	所蔵	出土地、館蔵番号など	図番号
1	染付芙蓉手チョコレートカップ	1660～1680年代	口径7.5cm、高さ7.5cm、底径3.7cm	カディス博物館	カディス、「大明年製」銘	図2
2	染付赤子文チョコレートカップ	1660～1680年代		レオン博物館	カラセド・サンタ・マリア修道院遺跡	図5
3	染付花虫文芙蓉手皿	1660～1680年代		トレド・サンタ・クルス博物館	トレド修道院	図3
4	染付花虫文芙蓉手皿	1660～1680年代		セビーリヤ考古博物館	アラメダ・デ・エルクレス広場	図4
5	染付赤子文チョコレートカップ	1660～1680年代	口径8.3cm、高さ7.4cm	マドリッド国立装飾美術館	M.N.A.D.3508、「大明年製」銘	図6
6	色絵蓮池水禽文芙蓉手皿	1660～1680年代	口径21.3cm	マドリッド国立装飾美術館	M.N.A.D.3515	図7
7	色絵兎人形	1660～1680年代	長10cm	マドリッド国立装飾美術館	M.N.A.64120・64121	図8
8	色絵花束唐草文大皿(金襴手)	1680～1740年代	口径56.7cm	マドリッド国立装飾美術館	M.N.A.D.10624	図10
9	色絵牡丹菊文大皿(金襴手)	1680～1740年代	口径29.8cm	マドリッド国立装飾美術館	M.N.A.D.3574	図11
10	色絵桜間牡丹文皿(金襴手)	18世紀以降	高27.7cm	マドリッド国立装飾美術館	M.N.A.D.5496、ヨーロッパ産の写しか。	図12
11	色絵松枝文大鉢(金襴手)	1680～1740年代	高25.5cm	マドリッド国立装飾美術館	M.N.A.D.10622	図13
12	色絵紅葉唐草文大皿(金襴手)	1680～1740年代	口径53cm	マドリッド国立装飾美術館	M.N.A.D.10625	図14
13	色絵桐鳳凰牡丹唐草文大壺【一対】(金襴手)	1680～1740年代	高91cm	マドリッド国立装飾美術館	M.N.A.D.10018・10020	図9
14	色絵牡丹鶴文大花瓶(べべら口)	幕末明治	高91.5cm	マドリッド国立装飾美術館	M.N.A.D.10046	図16
15	色絵鶴窓絵文蓋付壺	幕末明治	高54.5cm	マドリッド国立装飾美術館	M.N.A.D.10626	図15
16	色絵菊梅文受皿付き碗(5組)	1680～1740年代		東洋美術館	後世のコレクションか。	図17
17	色絵龍鳳鶴文大皿	幕末明治		東洋美術館	後世のコレクションか。	図18
18	色絵蘭花人物文大皿	近代		東洋美術館	後世のコレクションか。	図19
19	色絵桜人物唐草文大皿	近代		東洋美術館	後世のコレクションか。	図20
20	色絵花鳥文瓶【一対】(金襴手)	1680～1740年代	高22cm、底部11cm、口径21cm	インディアス総合古文書館	後世のコレクションか。	図21
21	色絵牡丹菊鳳凰文大壺(金襴手)	18世紀以降		ソローリヤ博物館	ヨーロッパ産の写しの可能性あり。	図30
22	色絵椿桐文大皿(金襴手)	1680～1740年代		セラロボ博物館		図24
23	色絵紅葉牛菊文大壺(時計付き)(金襴手)	1680～1740年代		セラロボ博物館		図22
24	色絵菊紅葉文瓶【一対】(金襴手)	1680～1740年代		セラロボ博物館		図23
25	色絵武者絵大花瓶(べべら口)	幕末明治		セラロボ博物館		図25
26	色絵松鶴文大花瓶(べべら口)	幕末明治		セラロボ博物館		図26
27	色絵海浜文大花瓶(べべら口)	幕末明治		セラロボ博物館		図25
28	色絵牡丹鳳凰文大皿(金具付き)(金襴手)	1680～1740年代		マドリッド歴史博物館	近代か、ヨーロッパ産の写しの可能性あり。	図29
29	色絵桜桐文大壺(金襴手)	18世紀以降		ロマン主義博物館		図28
30	染付松柳文大花瓶【一対】(べべら口)	幕末明治		ロマン主義博物館		図27
31	染付竹林双鶴文大花瓶(べべら口)	幕末明治	器高153・155cm、口径43cm、底径33cm	マドリッド国立考古学博物館	「日本肥前有田香蘭社深川製」銘	-